23PO-am354

漢方を健康管理に活用する方法の考案　～漢方問診「気虚・気鬱・気逆」と性差～

○日置 智津子[1], 伊藤 エミ[2], 中井 賀世子[2], 村重 史子[2], 宇高 一郎[2], 椎名 昌美[1], 武田 卓[1]（[1]近畿大学東洋医学研，[2]近畿大学東洋医学研診療所）

【目的】近年、臓器間における体系的な働きを担う伝達物質が発見され、これらを運搬する流れの重要性が考えられる。漢方では生化学的所見はもとより、「気・血・水」の身体循環を判断し、惹起される症状を関連づけて治療を行う。この時、使用される漢方問診を日常の健康管理に活用できるように、近代医療の視点から再検討する。【方法】当診療所を受診した認知症でない、重症皮膚炎でない患者 450 名（男性 122 名、女性 328 名；平均年齢 60.0 歳、56.2 歳）を対象とした。初診時と来院時に薬剤師が確認した問診調書をもとに、性別ごとに解析をした。気虚（身体的側面；疲れやすい・風邪をひきやすい・下痢しやすい等質問は 7 つ)、気鬱（精神的側面；気分がすぐれない・いつも不安・とりこし苦労が多い・些細なことが気になる等、質問 7 つ)、気逆（自律神経的側面；突然の頭痛・発作的な汗・のぼせやすい・動悸等、9 つ)、他に「物忘れが多い」「便通」、「睡眠の質」（寝起きが悪い、眠りが浅い等、6 つ）等 24 項目につき回答を得、相関関係を調べた。【結果・考察】相関の判定には、上田の簡便法を参考にした。男女ともに「気虚と気鬱」の相関の直線性は大きかった（ｒ=0.52)。女性は男性より「気逆」と様々な症状との強い相関関係を示した。「立ち眩み・眩暈」は（ｒ =0.43)、「目が疲れやすい」（ｒ=0.39)、「首や肩の凝り」（ｒ =0.45)、「咽頭からみぞおちの重苦しさ」（ｒ=0.34、男性では相関関係は認められない)。男性は「排尿時の違和感や異常」と「年齢」において直線的相関（ｒ=0.47）があり、本分類による気逆では性差が認められた。よって女性の心身不調の症状には、自律神経が男性よりも関与すると考えられた。漢方問診の相関検討は、対象者の身体状況を把握する手段になると推察できた。